第6号 ちょっと気になる検査データ

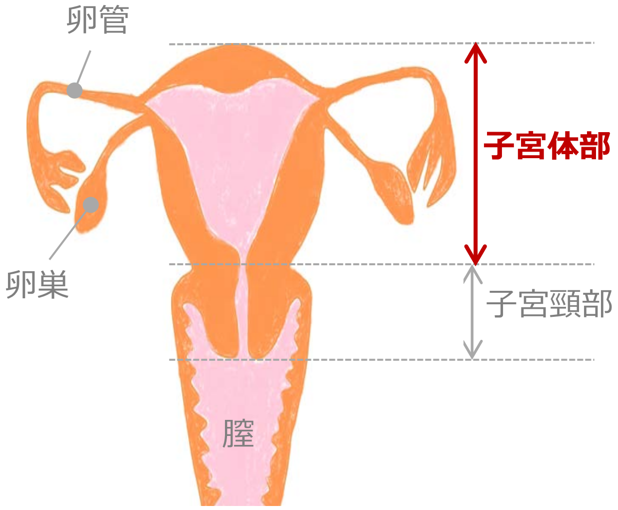
子宮体がん

子宮体がんってなに？

子宮がんには、子宮の入口である頸部に発生する子宮頸がんと、体部に発生する子宮体がん(子宮内膜がん)があります。胎児を育てる場所である子宮体部の内側は、子宮内膜という組織で覆われており、子宮体がんはここから発生します。

近年子宮がんの中でも、体がんの占める割合が高くなってきています。体がんは、40歳代から多くなり、50歳～60歳代の閉経前後で最も多くなります。主な症状として、不正出血がみられます。

多くの子宮体がんの発生にはエストロゲンという女性ホルモンが深く関わっています。このホルモンの値が高い方(出産経験が無い、肥満、月経不順、高血圧、糖尿病など)に発生しやすいことが知られています。一方、エストロゲンとは関係なく生じるタイプもあり、これらは癌関連遺伝子の異常が原因といわれています。



同じ子宮がんでも、頸がんと体がんでは原因が異なります。診断や治療も異なることが多いので、違いを正しく理解することが大切です。

子宮体がんに関わる病理検査 (細胞診・組織診について)

●細胞診●

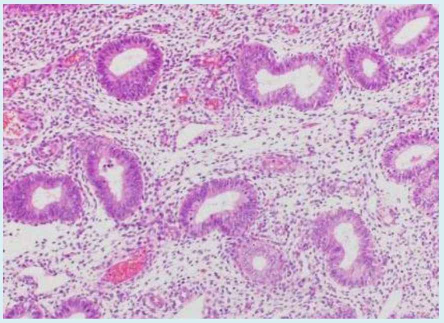
子宮体部内膜から細胞を採って、正常な細胞かどうか調べます。

●組織診●

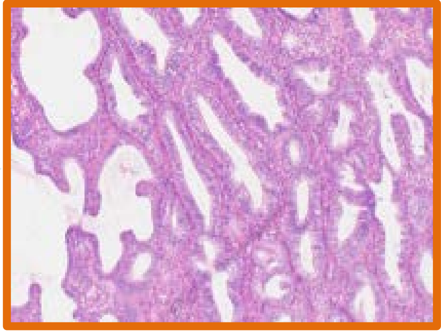
細胞診で異常が認められた場合や、臨床的に必要と判断された場合に内膜組織の一部を採取して組織の観察を行い、より詳しく診断します。

＊子宮体部内膜の組織像(HE標本)＊

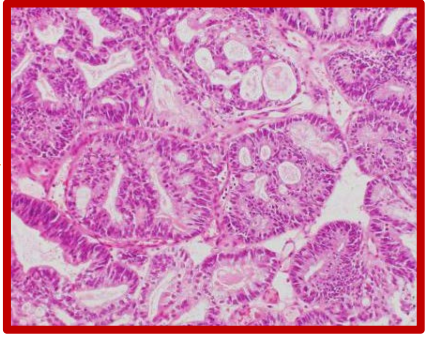
正常子宮内膜



子宮内膜増殖症



子宮体がん (子宮内膜がん)



子宮内膜増殖症は、子宮内膜が過剰に増殖したものです。
多くは正常化したり、その状態のままとどまりますが、一部には子宮体がんに進行するものもあります。
このため、子宮体癌の前癌病変とされています。

子宮体がんは、早期発見・早期治療が重要です。
とくに、閉経後や更年期に不正出血がある場合や、閉経前でも気になる症状がある場合には早めに婦人科を受診しましょう。

済生会三条病院　臨床検査科

平成30年4月